優秀賞

# ぼくの大すきな場しょ

小豆島町立星城小学校二年　木下　琥大郎

「早く外においでよ。」
せみが鳴いている。ぼくのことをさそう。ヨーグルトを食べてパンを一口かじると家をとび出す。まず、ガレージのおもたいシャッターをあけて自てん車を出す。と、ビュンビュンと風になって走り回る。それにまん足したら、つぎは虫あみをもって魚やさんのうらにあるじん社でセミとりをする。ぼくがすきなのは、小さくてかわいいミンミンゼミともようがかっこいいアブラゼミ。セミと十分たわむれると、家の前に帰ってきてチョウやトカゲをつかまえる。きれいなクロアゲハは、かごに入れるとかわいそうなので、ツーショットをスマホでママにとってもらい、すぐににがす。トカゲは小さくてかわいいので、二、三日ぼくの兄きになってもらって家にいてもらう。虫とりがおわってのどがかわいてくると、家に入りコップ一ぱいの水をグビッとのみほす。朝から三十どごえのま夏のあつさの中をうろうろしているので、この一ぱいがとってもおいしい。
　その後は、何の用じもないのに、ママとぼくがじ石になってしまったように、ぼくはママのところへ行く。あせをかいたベチャベチャの頭のままよっていくので、
「うーわ、ベッチョベチョ。はなれて。」
とママにおこられる。それでもぼくは、はなれないぞとぎゅっとだきつく。すると、タオルであせをふきながら、頭をなでてくれて、
「何かつかまえてきたん。」
とやさしく話を聞いてくれる。ぼくは、つかれた体でママにしがみつくといやされる。
　体力が回ふくすると、またすぐに外に出て水用のあみで用水ろにいるメダカをとる。あみを水の中に入れて用水ろにそっと走るだけで何十ぴきかつかまえられる。
メダカをもって帰ると、自ぜんとママのひざにたおれこむ。またママが、
「あつい、はなれて。」
とおこる。でもぼくはあきらめない。ママの気もちは、ほとんどおこっているが、少しだけは、
「ほんとにしょうがない子。かわいいなあ。」とおもっているはずだ。たぶん。そのまま、ママとのんびりしていると、
「かたづけしたん？。」
と聞かれる。
「ううん、出しっぱなし。」
と答えると、
「かたづけておいで。」

とまたおこられる。そんなかんじで、ぼくは毎日、毎日、同じくりかえしですごしている。

ぼくのすきな場しょは外だけれど、もっともっと大すきな場しょはママのひざの上。ママは、いつもにこにこえがおでぼくをむかえてくれる。もし、虫を一ぴきもつかまえられなくても、ママのひょうじょうを見ると、ぼくも自ぜんとにこにこえがおになる。楽しかったなあという日も、ママのにこにこえがおでさらにうれしい気もちになれる。だから、ママのひざの上はすわるとうれしくて楽しくなるパワーをもらえる場しょ。ぼくをうんでくれたママのひざで、やわらかくて心がぽかぽかするから、ぼくの一番はここしかない。ママも、ぼくがひざにのっているとき、大すき、とぼくに言ってくれる。

ママ、ぼくもずっとずっと大すきだよ。いつもぼくをにこにこえがおにしてくれるみたいに、ママの元気がないときは、ぼくがいっぱいわらわせるからね。